

浄穢不二（じょうえふに）

浄土真宗の七高僧のお一人である源信僧都（幼名一千菊丸）の幼少の頃のお話です。

千菊丸が生家の近くで遊んでいたところ、一人の旅僧が小川で手を洗っていました。その川は殊のほか濁っており、それを見かねた千菊丸は、「お坊さま、手を洗われるのでしたら、あちらの川の方がきれいですよ」と声をかけたのです。

するとその旅僧は、千菊丸に礼を述べた後、「浄穢不二」と答えたのです。つまり、きれいも汚いも悟ってみれば一つである。濁っておるとか澄んでおるとか言うのは迷っている者の言うことだということです。

旅僧のこの言葉に、千菊丸は、「浄穢不二なら、お坊さま、どうして手を洗われるのですか？」と問い返したのです。

これには当の旅僧、一言も答えることが出来なかったということです。

なぜ、返答できなかったのか、もうお分かりのことと思います。

もし、旅僧にきれい汚いのとらわれの心（迷いの心）がなければ、すなわち浄穢不二だと悟っていれば、手を洗ったりはしないはずです。手を洗うということは、その旅僧にきれい汚いのとらわれの心（迷いの心）が未だ残っているということです。

旅僧は「浄穢不二」の意味は知っていたのですが、その使用方法までは知らなかったようです。

仏教用語—浄穢不二、色即是空、煩惱即菩提、等々—は確かに奥深い論理ですが、それらは我が身を通して実践されて初めて価値があるのです。

頭で分かることと、それを実行することは全く違います。ですから、この旅僧のように、「浄穢不二じゃ」と、悟ったような顔をして、手を洗うのです。

私たちにとって大事なことは、こうした深遠な仏教の道理を前に、「私にはとてもかなわぬことです」と、我が身の愚かさに気づくということです。

「浄穢不二」の言葉をもて遊んで、濁れた水で手を洗うような過ちを犯すより、きれいな水で手を洗う方が、よっぽど自然なことです。また、それが凡夫の日暮らしというものです。

そんな私を、阿弥陀さまは「安心して下さい。決して見捨てませんから」とおっしゃって下さっているのです。

まさに凡夫直入の教えであります。

\* 七高僧について

七高僧とは、お釈迦さまから親鸞聖人に至るまで、浄土教を伝承された方々の総称で、親鸞聖人は次の七人の高僧方を制定しています。

- 1・龍樹（インド）
- 2・天親（インド）
- 3・曇鸞（中国）
- 4・道綽（中国）
- 5・善導（中国）
- 6・源信（日本）
- 7・源空（日本）

平成17年12月 「光明寺だより43号」より